

山崎朝雲

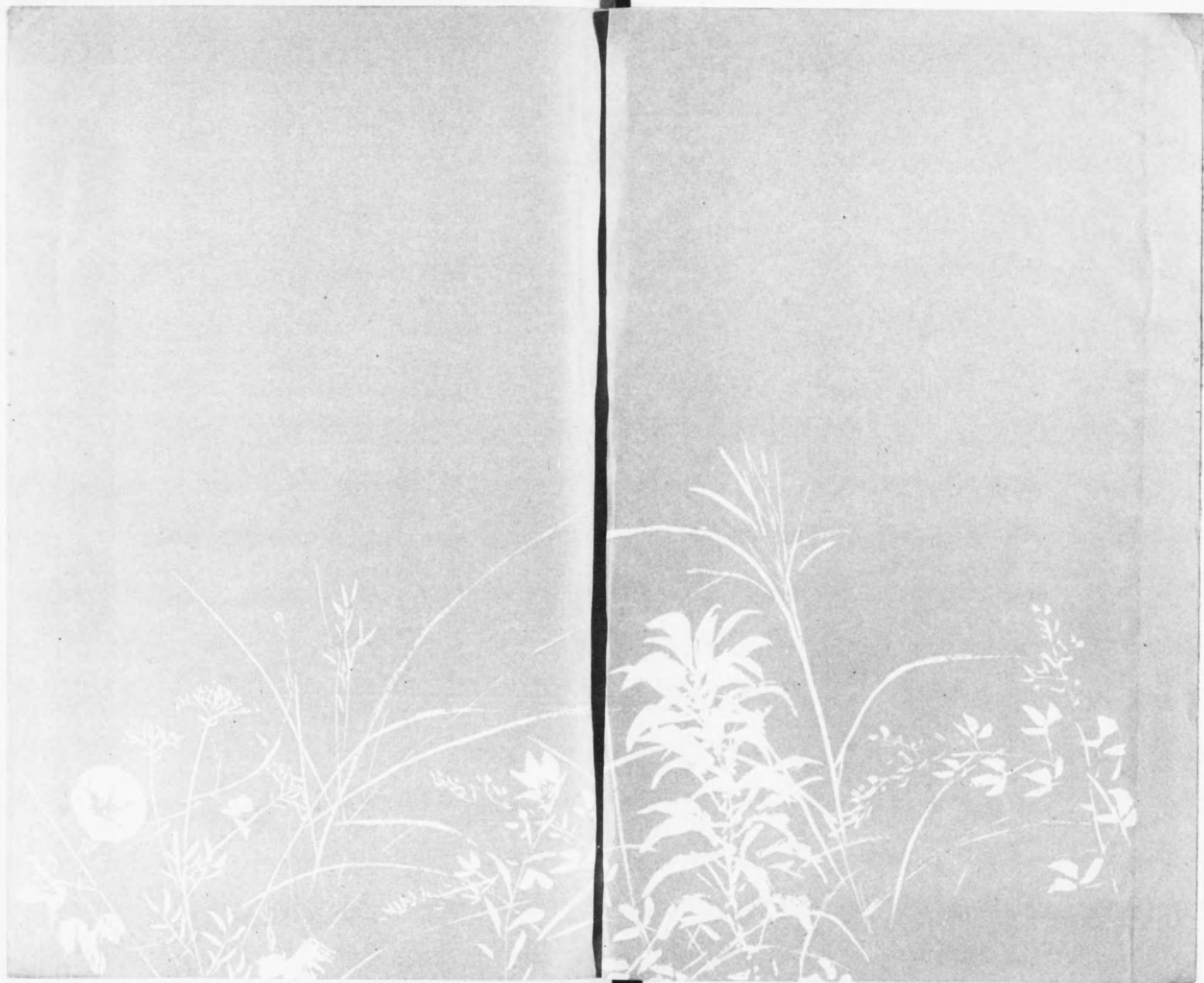
特 258

461



始





特 258
461



昭和美術百家選 第二十三編

帝國藝術院會員 皇室技藝員

山崎朝雲



梅 香 真 香 出

印

黒田 長成

親 仲 田

辭題 下閣成長田黒 爵候

千里馬過伯
樂而揚英名
於天下

後子堅



辭題下閣郎太堅子金 同順密極 爵伯

頭山滿翁題辭

三
之
集



風 禱
建 水
信 清
也

辭題下閣 信實野尾 將大軍陸



(員藝技宗帝 = 員會院術藝國帝)

照小雲朝崎山



影尊御皇上山龜

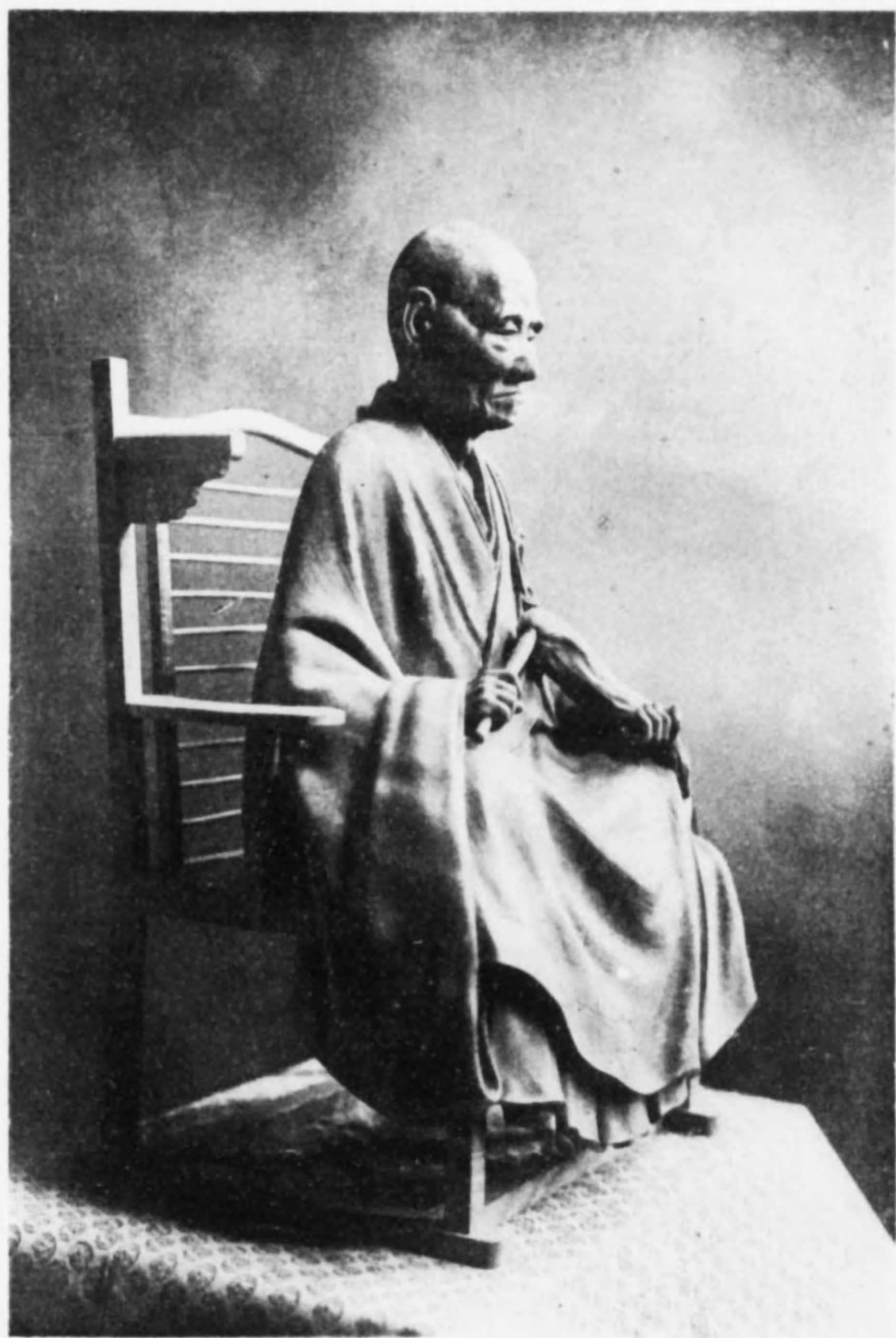
念記室元



(卯木) 景光時當作製像尊御皇上山龜



— 漢 滄 —



—— 師 禪 厓 仙 ——



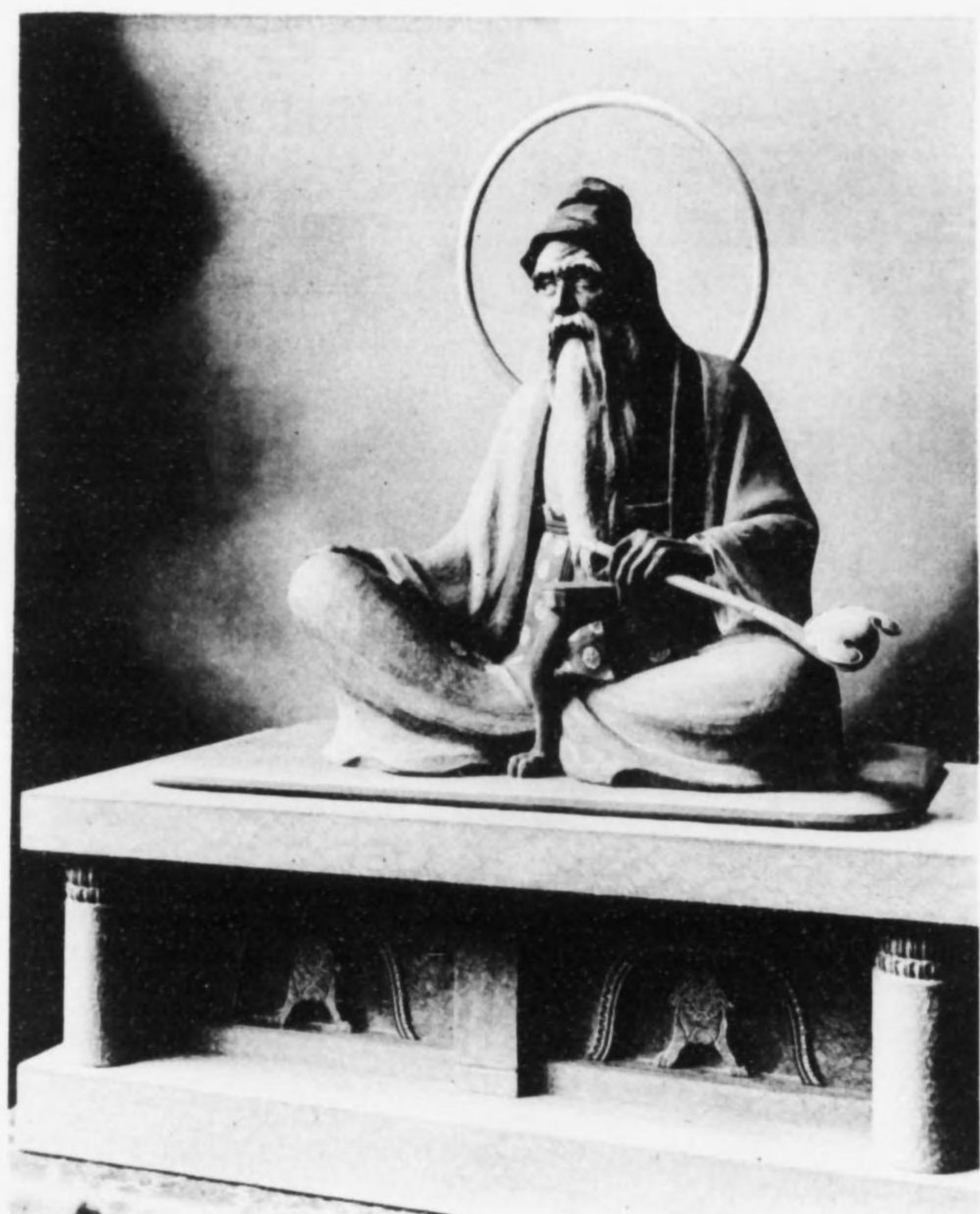
—— 以勝衛兵又佐岩 ——



—— 樂 毬 打 ——



—— 遊 東 ——



摩 維



薩 菩 賢 普 佛 尼 牟 迦 釋 薩 菩 珠 文



一 の 譜 印



二 の 譜 印

序

名匠朝雲、與予同鄉貫、予曾在東都、起義士會、介友某初相識、囑刻大石良雄像、二年而成、妙技逼神工、惜哉、遭關東震火燒失焉、既予移居浪華、欲作豐公記念美術館、重囑刻豐公像、復二年而成、神彩奕々、真有視再生英雄之感矣、而今編昭和美術百家選、收彼第二十三編、推爲木彫界第一人、蓋亦衆論之所歸歟、且予以出彼於同鄉貫頗爲欣快、祇憾予不文不能盡其意耳

昭和十四年七月七日（聖戰二周年記念日早旦）

後學 藤井石童識

題 詩

石

童

天使斯人就盛名。

先降艱苦碍其生。

志全妙技神工奪。

百樣千姿隨手成。

昭和美術百家選

第二十三編

「山崎朝雲」

一、特色ある彼の郷土「筑前」

筑前は九州の北端に位し、北は壹岐對馬を隔て、近く朝鮮に、又た杳かに滿洲、北支那を望み、海は玄瀋澎湃たる黒潮の通過路に面してゐる、随つて此地に生々する人々は、意氣自づから豪快で、且つ最も古くから大陸文化の影響を受けてゐる、史を按ずれば博多の津は、何れの地よりも最先に海外交通の尖端に立つてゐる、往年其の地方より掘り出された金印「怡土國王」の如きを見ても、此地人が既に漢代にあつて彼地に往復してゐた事が證據立てられる、其れから一千有餘年前に、仲哀天皇が熊襲を征討され、其の本據たる新羅を討滅すべく、神功皇后の此地を基點として渡海されし如き、又た三百五十年前に豊太閤が古博多を復興すべく、滯留朞月に亘り、宮崎の松原(今の東公園)に陣營を張り、閑を遣るべく屢々茶筵を設け配下の諸雄を會して旅情を慰めた、其時土着の富豪たる宗洪、宗室の徒が、常に其席に出入して肝膽相照せる如き、亦た謀將黒田如水に命じ一大都市の繩張をなさしめて、大博多を復興せしめたのは、皆な英雄豊太閤が大陸

經營の基脚地を作つたもので、而も此地に大封を與へて如水の全智全能を盡くさせし如き、彼の意圖の那邊にあつたかを付度するに餘りあるであらう。

惟ふに當年の兩英雄、未だ其の宿圖を暢ふる能はずして逝けるも、其の餘韻と遺風とは、壯嚴雄快の玄海の風氣と共に永く其の子孫の神魂に傳へられて、幾多の快漢と特異の風物を産み出してゐる。

今之を其地の人物觀よりすれば、豊公時代の貿易界の覇人としては宗湛、宗室、降つて忠烈の士としては栗山大膳の如き、明治維新にあつては平野次郎、野村望東尼、政治家として黒田長成、金子堅太郎、栗野慎一郎、山坐圓次郎、添田壽一、廣田弘毅の如き、軍人として明石元二郎、尾野實信、西川虎次郎、香椎秀一、浩平兄弟、伊豆凡夫の如き、文人學究として、貝原益軒、亀井道藏父子より降つて、井上哲二郎、寺尾亭壽兄弟、福本日南、高原操、吉田貞雄の如き、實業家として、團琢磨、安川敬一郎、貝嶋太助、平岡浩太郎、麻生太吉、香椎源太郎、飯田延太郎の如き、國士として箱田六輔、頭山滿、杉山茂丸、内田眞平の如き、藝術家として川上音次郎、橋智定、富田溪仙及本編の山崎朝雲の如き、皆な其地の有する惠澤の醗酵し來つたものである、此他藝術上の産物として最も特色あるものを擧ぐれば、博多人形、博多仁和賀の如きは他に容易に求めがたき特異性を有するものであらう。

願れば徳川覇府の三百餘年の歲月は、甚だしく國民の海外雄飛性を箱詰とされた感あるも、而も其間に於て各藩に各種の特異性が陶冶されてゐる、就中筑前の如きは藩祖如水の裕達睿智にして、大は益々大なるべく、小は愈々小なる伸縮自在、緩急即應の風氣を植付け、加之に哲僧仙崖の來つて精神的陶冶を與へたことの大なりしは、今猶其地の人々に歷々として其餘風、遺韻の偲ばれるものがある、特に況や元寇の役には

其地に於て十萬の蒙古軍を撃滅し、近くは日露役に東郷提督が驍霧の艦隊を覆滅し、今復た百萬の大軍を對岸の大陸に送り日夜艦艇の海を覆ふて往來せる如き、皆な其の郷土の前に横たはれる玄海洋上の活畫である而して親しく其群に伍し、又た之を目撃せば誰か其の心魂に特異の感激を與へざるものあらむや、即ち知る筑前人の概して感激性に富み、雄壯豁達なる反面には、淡々水の如き玲瓏性を有する如き、一に其の實境と活ける事相とに依りて自然に陶冶化されたものであらうことを、故に本編の主人公たる

山崎朝雲其人と其の藝術の如き、亦た最も多分に此の特異性の結晶されたものであることが首肯されるであらう。

二、其の生立

「家系」……山崎朝雲は、慶應三年二月十七日、利右衛門六男として、福岡市博多橋田前町三十六番地に生る、其家は代々陶工としての名門であつた、遠く遡れば慶長十三年、黒田孝高（如水）が備前（福岡）より筑前に轉封されし時に扈從し來れる陶工山崎權右衛門を祖先とし、爾來連綿として其業を繼ぎ、父利右衛門に至つたのである。

朝雲夫人榮子は、明治三年二月二十日、黒田藩士山田氏の家に生る、父妙福は、比叡山延曆寺に屬する筑前玄清派の管領たり、其昔延暦年間、開祖傳教大師の延曆寺建立に際し、地鎮祭執行の時の琵琶樂師玄清を祖先とす、而して夫人の家兄智定は筑前琵琶の開祖として其の名當代に高し。

朝雲は八人兄弟（兄五人、姉二人）の末子として生れたので、母の慈愛は特に篤かつた、而も生家の家計は漸次苦境に陥りつゝあつたので、疾くも小學卒業頃から人生行路難の第一歩を踏み出さねばならなかつた然れ共彼は幸に健康に恵まれ、且つ堅忍不拔の素質に富んでゐたから、其の前途に横たはれる幾多の艱難を征服して、天來の藝術を玉成して行つたのは、既に此の年少時代から閃めき初めたのであつた。

「天稟」……所謂「好きこそ物の上手なれ」とは、正に彼の少年時代が其れであつた、一例を擧ぐれば、彼の生地は有名なる博多人形の本場であるから、彼の家の附近には人形師の家がズラリと並んでゐた、其中の一軒は彼と親交あり、彼を養子として懇望された、而して彼は常に其家に入出し、多くの人形師と交はり、又た自身でも塑像を造つたが小童に似合はぬ其の巧妙さには彼等をして舌を巻かした、之は彼の十二から十五六歳までの事であつた、當時の作品は、犬、唐獅子、其他動物、人形などで、其れに一々丹念に彩色が加へられた、而して其の成品は何れも素人離れがしてゐたので、之を見るものに既に此時より將來の大成を囑望された、而して彼と親交の家から、養子としての懇望は益々切であつたが、彼を鍾愛する母は、何としても彼を手離すことを肯んじなかつた、然るに他面には彼の人形師としての運命は次第に薄らぎ行き、其の宿命的彫刻家としての新境地に踏み出すべき機運が持ち上つて來た。

(4)

三、彫刻家としての第一歩

「修業」……彼の家兄等は皆な師匠を自家に招きて修業したが、末子としての彼れの伸び行く頃には家運

漸く傾きかけたので、彼は型の如くに家居して學ぶ能はず、人形師の家に通ひて研究を積んで行つた、其頃不幸にして（彼れ十五才）父親を失つたのである、雖て彼れ十七八の青年期に入らんとするや、兄弟等は彼をして何の職業に就かしむべきやに就いて協議を凝らした、而も彼は彫刻家たることを熱心に主張したものと、皆な其れには反對を唱へられた中に、唯だ一人の家兄だけが賛成して呉れたので、やつと其の志望の緒に就くことが出來た。

「最初の師」……は福岡の佛師高田又四郎であつた、此の人は天才的な名人肌で初め僧侶となるべく寺院に入れられたが、肝腎の経を讀まずして彫刻にのみ夢中であつたので住職の愚溪和尚は彼を京都に伴ひ行き京都の大佛師吉村利右衛門に學ばせた、其れから彫刻師として眞剣な努力を積んで一家を成し、其の地方の名人として聞ゆるに至つた、彼は則ち此人を師とし毎日辨當持參で其門に通ふこと約三年に及んだ、其間に彼は各所に藏せられる名品佳作を漁つて熱心な研究を續け、且つ幾多の作品を仕上げた、此師は曾て一度も手を執つて教へて呉れなかつたが、其の語る所は皆な斯道の金言玉語であつたので、後年に至り彼を益する所が多かつた、即ち彼は其手より學ばずして耳より學んだものである、當時此師の他へ洩せる言に「山崎を京都に上せたい、田舎におくのは惜しいものだ」とあつた、とあるに稽ふれば、其師の心では、自己の田舎藝術の却つて優越な彼の天分を累する虞れあつたので、手を下して教へなかつたものであらう、之に見るも此師の凡庸でなかつた點が仄の見ゆる。

「獨立苦闘」……斯くて彼は三年にして師の門を出で、彫刻師として一家を立てた、時は明治二十年、（滿二十歳）其家に慈母を伴ふた、而して一家計を支ふると共に兄の家計を援助すること六年に及んだ、次

(5)

で二十二歳で、現夫人と結婚した、當時の彼の苦痛の容易でなかつた事は、兄の家計援助を負担すると共に自個は漫性の脚氣病に累されたので、更に一層の苦難を加へられた、而も勇敢にして堅忍なる彼は、毫も其志を屈せず、病と闘ひつゝ、生活の糧を稼ぎ、全精神と満腔の熱を注いで彫刻へ猛進をつゞけた、其時の作品といふのは主に佛像、佛具其の他人形、床置物などであつたが、彼は在來の類型に捉はれない獨創の意匠を加ふることに努力したので、漸次他の認むる所となつた、而して當時評判となつた。

「處女佳作」……に「北辰妙賢」がある、之は彼が仄暗き三分芯のランプの下で、連日連夜屹々として刻み上げた頗る手のこみ入つたもので、見事な出来ばえであつたので、忽ち斯道の同人等を驚かした、而して續いて送り出された佳作は

「獅子を擁し巖に倚りて眠れる羅漢の覺めかけた時、其巖が夢とも現ともなく獅子に見ゆるの圖」を、黒柿材で彫刻したのが、第三回内國勸業博覽會を通過したと云ふので、忽ち遠近の話題となつた、此の時代の彼の藝術一徹の勇氣と熱とは、此の如くに天の降せる如何なる艱難をも征服し去り、豊富なる天稟を練磨し大成したもので、恰も他の諸名匠の大成の道程に彷彿たるものがある。

四、京洛へ進出

「龍虎相搏」時は明治二十五年、青春二十六歳、彼の血氣正に横溢の際、農商務省の前田正名（後の五二會長）は、福岡縣農商務課の案内にて、博多人形を視察した、彼は陳列された多くの人形を見て心中甚だ

懐らぬ思ひをした其中に、不圖「龍虎相搏」の彫刻を見出した、其れは從來の龍虎の型を破り、虎は猫に、龍は蛇に酷似してゐるが、如何にも生氣激濁として今にも飛びかゝり相な凄惨の氣が満ちてゐた、此の作こそ彼の中央進出の動機を與へられたものであつた、之に就き彼は今猶老懐に消えがたき挿話を有つてゐる、其れは

「ある日、彼の家の裏庭に猫と蛇とが争闘をやつてゐる、猫の蛇を覘つて一撃を與へんとするや、全身の斑毛は悉く逆立ち、双手の爪は利鎌の如く震ひ、啊呷の聲凄しく詰め寄せる、對手の長蛇また鱗を立て巨口を開きて只一呑みに葬らんと氣負へる狀は眞に勇ましくも亦凄惨の極みであつた」而して之を目撃せる彼は一驚を喫すると共に、忽ち其心に叫んだ「あゝ好題目ご參なれ、此の意氣を我が鑿の上に」と、凝視すること多時、天の與へし此の神機を掴み得たのである、

而して其れに加ふるに、偶々知人の朝鮮より齎らし歸れる風變りな蛇のアルコール漬を見て、ヒントを得出來上つたのが、此の龍虎相搏の圖であつた。

「處女佳作」彼のこの非凡の作に神魂を打たれた前田は、幾回か賞讃の辭を繰返し「あゝ此の作者を田舎に埋らすのは惜しい、京都へ進出さして大いに其技を磨くが宜い」と頻りに勸奨し、且つ其頃京都美術貿易の權威たる池田清助に紹介して呉れた、而して龍虎の作は、縣農商務課の古賀只平より京都の池田へ直送され、間もなく其れは外國人に買取られた、而して池田より作品代金は何程であるかを問ひ合せて來た、然るに驚くなかれ其答は……「只十三圓」と云ふのであつた、池田では其れは屹度百三十圓の間違ひであらうと入念に再び問合はせて來たが、矢張り只の十三圓に相違ないと云ふので二度吃驚したとのエピソードが残さ

れてゐる、此の一件より池田では彼を招聘したくなり、再三の上洛勸誘に動かされ、遂に住みなれし博多の町を後にして旅立つことゝなつた。而して慈母を家兄に託し、其妻と一女とを同行して入洛したのである。

『上洛』 さて池田商店に来て能く其の内容を検し、又た他より店の風習を聞き、郷里で豫想してゐたところとは大分違つてゐるので、これでは到底自己を満足させることは出来ない、どうしても東京へ進出したいといふ覺悟が起つて來た、併しオイそれと飛出す譯にも行かず、其間岡田仙等と友として親交を結び、何時の間にか三年の月日は京都で流れて行つた、而して、彼は求められるがまゝに、輸出彫刻の製作にのみ没頭したが、名人の腕の冴は一作毎に歎賞されて飛ぶが如くに賣れて行くので、ワッサと來る注文に應じ切れな、其れで店主の池田は、作料をウンと奮發するから、もつと急速に作ることを懇願されたが、藝術真心の豊かな彼としては到底、其の要求に應ずる譯に行かず、益々京都生活が厭やになつた。

此の時代、彼は郷里の慈母に對して毎月の送金を怠らなかつた、で池田は之を見て深く彼の孝心に感動し特殊の待遇をして呉れた、即ち其の住居の如きは附近の教生會に定め、説教場の二階を開けて彼が自由な製作場として當てがつて呉れた、次で第四回内國勸業博覽會が京都で開催されたので、彼は此時と計り腕に燃りかけて作り上げたのは、高二尺五寸の「養老孝子」であつた、而して出品の結果

「妙技銅賞牌」を贏ち得た上に宮内省御買上の光榮に浴したので、彼の聲名は京洛を動かした、而して彼の此の傑作は忽ち彼が前途の運命を開きて東都進出の機運を促進した。

五、東上の宿志成る

「龍、雲を得」 第四回内國勸業博覽會の當時、農商務次官金子堅太郎（現樞府顧問官伯爵）は同博覽會、且つ美術貿易商として京洛の第一位たる池田商店を視察した、而して多數陳列された工藝品の中より、黄楊材で刻まれた二羽の雀の嘴み合へるのに巧に彩色を施されたものを發見した、而して

「ホー之は見事ぢや、誰の作か、ハ、ア彼の博覽會で妙技銅賞牌受領の同一人であるか」といふ事から此の作者の博多出身なることを聞き、其れは私と同郷だ、會つて見たいといふので、茲に金子次官と、朝雲との初對面が遂げられる事となつた。

凡そ郷土愛は、他郷にて邂逅する程、感激を催すものはない、即ち兩者の當時の懐かしみは察するに餘りある、で彼は次官に對して、山崎家は代々藩主黒田侯に仕へ、苗字帯刀を許され、其の祖先権右衛門は、瓦師として名聲（遺作の鬼瓦は現に東京帝室博物館に所藏さる）ありしこと、及び自個の東都に進出して斯道の蘊奥を究めたきことを語つたので、次官も大に同情し、其れでは君を舊藩主黒田侯爵家の普請監督といふ名目で、同家の補助を受け得る様、その斡旋を約された、此他にも一二の機縁を生じ、愈々宿望の東上を決定する様になつた。

『東上の機至る』 これは彼と同縣の久留米の人で東京美術學校第一回卒業生に江中萬藏（號無牛）といふものあり、京都美術學校教授として在洛中、屢々池田商店に來て陳列の美術工藝品を模寫の際に知己となり、其の紹介で、同じく美校教授であつた大村西崖を知ることゝなつた、大村は東美彫刻科出身で、且つ當代彫刻界の巨擘、高村光雲に師事したことがある、恰も好し、光雲は當時博覽會美術審査のため入洛してゐるので、大村を介して光雲と會見を遂げ、其の宿望を陳べ入門の許諾を得た、而して出發に先きだち、更

に時の京都美術學校長今泉雄作より光雲への懇篤な紹介状を貰ひ、愈々東上の途に就くことゝなつた、時は明治二十九年一月八日、(壯齡三十歳)鴨川の水は沾れ、東山の翠嵐猶淡き爽曉であつた、而して其妻と子女とを郷里の博多に返し、家兄に託せる老母に孝養を捧げ、心に燃ゆる恩愛の一念を酬ゆることゝした、當時堺宗一郎の扶助を受く、さて夢と過ぎし三ヶ年の京洛生活で相當其地に馴染める身の、一たび去つて吾妻の空に向へる心には言ひ知れぬ淋しさを感ぜられた。

彼は新橋驛に着くと共に、金子次官を其の邸に訪ねて次官に歡び迎へられ、約束の如く黒田長成侯の援助に浴することゝなり、赤阪の侯爵邸に居宅を興へられたが、此處より其師光雲の本郷の宅までは餘り遠隔なので、彼は特に居宅を師の邸に近き現住の場所附近に定めて、日夕師の指導啓蒙を受くること、約二年に及んだ。

斯く、彼の光雲門に入ったのは、明治二十九年一月八日恰も師が工場開きの當日であつた、來會した人々は、林美雲、米原雲海、本山白雲、瀧川慶雲、加藤景雲外七八名であつた、回顧すれば入門半ヶ年即ち九月十六日母親危篤電報後、死去の報に接し直に歸國の手配せしもの、今修業を初めたばかりの際とて妻子に逢ふて再上京出來ざるを怖れ家兄に託して歸國を見合せ其儘終業を續けたが今や既に四十餘年の幾昔となり、師を初め當時參列の諸友多くは冥府に入り、彼れ亦た白髮の老翁となる、其の感慨果して如何。

六、大成の道程

『棲居』 彼の最初の住宅は、現在の住宅附近にて、師の光雲邸へ程遠くはなかつた、四疊半と六疊の二

室に左關と台所がつき、其側に掘井戸があり小さくとも瀟洒な結構であつた、當時は猶ランプの使用時代で家賃の如きも僅かに一ヶ月二圓五十錢であつた、此家で毎時も快感を興へられたのは、庭が廣く、其の前方一面は茶畑があつて眺望が佳かつた、故に彼は晝間は彫刻に神魂を打込み、夜は道具の手入れをしながら、中天高く澄み渡る月を仰ぎ、蟲の音などに耳を澄した時の感興は、今も猶老懐に刻まれて坐るに若かりし當年が偲ばれると云つてゐる。

當時は孤獨生活のことゝて、炊事、洗濯など一切合切皆な自づから之を營みつゝ數年を閱みした、其間自己の藝術精進の外には、眼中何物もなかつた、而して黒田侯爵家からは約束の如く毎月十二圓半の手當がある、彼は之に酬ゆるため、自作品の全部を提供した、斯くて其後一ヶ年半にして

『獨立自營』を決心し、其旨を黒田家に通じ、月手當を辭退した、後に至り金子伯から「大概なものは嘘を吐いて貰ひたがるのに、君は實に正直で感心だ」と褒められた、實際彼は無慾恬淡で、唯だ藝術向上の一路にのみ邁進したのである。

之は彼が妻子と同居してからのことである、其の隣家の甲乙から「あなた方は、何時ご飯を召し上りますか、一向その氣配も致しませぬが」とあつた程に、彼は彫刻と道具の手入れに夢中なので、食事の如きは「飢ゆれば食ひ、渴すれば飲むといふ」が如き自然生活をつづけたものだ。

『研究』 彼は單に製作に没頭するのみならず、古往今來の名作を漁つて、彫刻の神秘を探ることにも腐心し、機會ある毎に、神社佛閣の秘寶や名家の貴什品を漁つて見學を怠らなかつた、其他ある時の如きは、西洋彫刻を研究すべく、我家の庭前に釜を据えて寒天を煮、凡そ三十日間、日々石膏を取つて參考品を作り

上げた、當時、新海竹太郎、米原雲海、なども參會したものであった。

『道具の調製』 凡べて藝術は、其の手腕の老熟と共に之を表現して行く所の道具の吟味が大切である。猶かの劍客が正宗や祐定の名刀を漁る様なもので、彫刻も其の武器としての鑿や刀などの鋭利なものを要するの言ふ迄もない、然るに坊間で鬻ぐ所のものには確なものはないので、彼は其れに憚たらず、自づから鑿を下して小刀の作り換えなどをやつた、而して一作を果れば、其の道具の修理、補給などに十日位を要する、或時の如きは、師の光雲や、米原雲海、小倉惣治郎、海野美盛、新海竹太郎など、彼の此の慘憺たる苦心と努力とを見て驚歎し、且つ其の嚴肅な態度を深く讚美したものである。

『確乎たる地步』 彼は京都時代第四回内國勸業博覽會に妙技銅賞牌を博した「養老孝子」の如きは、江中無牛などの意見をも參酌して作り上げた如く、常に己を空しくして他の長所を探り玉成することに吝かでないかつた、故に彼の東上後は單に師光雲に聞くのみならず、苟も其の耳目に觸るゝものは、一切自己の藥籠に納むることを懈らなかつた、であるから今若し仔細に彼の作を檢討し、之を分析し行かば、其の採取の分子の中には、古くは我が天平、藤原、鎌倉時代より、漢土の周漢、六朝、唐宋より飛んで泰西の希臘、羅馬、英佛等の名家の手法、餘韻を發見し得られよう、而して其れを時代に適應すべく、彼れ一流の理想と工夫とに依りて巧に配劑、大成したのが即ち彼れ獨歩の藝術であらねばならぬ。

彼れ東上の初期にあつては、金子伯等の奨めに依り努めて各種展覽會に出品した、即ち彼れ卅二歳（明治三十一年）の時に、東京彫工會第十三回彫刻競技會に、木彫「母子遊歩」を出品、斯會最初の「金賞牌」を受領して名聲頓に同好間に鳴り渡つた。

『順風滿帆』 次で、東京彫工會の審査員に推され、更に明治三十三年、日本美術協會々員に列せられ

爾後同會審査員及協議會、幹事として連年盡瘁、畏くも明治卅三年、同三十九年には

皇后陛下の御前彫刻を、又大正二年には

天皇陛下の御前彫刻の恩命を辱くした。

明治四十年四月、東京勸業博覽會の審査員を命ぜらる、而して審査委員長は正木直彦、書記は香取秀真、審査主任は高村光雲であつた、當時其の審査につき非常な悶着を惹き起したが、彼は其の主張を曲げず正論を闘はした、而して幸に無事に治まつたが此時より大に正木直彦に彼の存在を認められた、

爾來彼の進路は實に順風滿帆、日本晴れの海上を走る輕舟そのものであつた。

次に文部省主宰の年々の展覽會には、或は審査員、審査主任となり、更に帝國藝術院會員、帝室技藝員等々、現代美術界の最高峰に立ち、一世を睥睨するの聲望と貫祿とを有しながら、一たび彼れ其人に對すれば依然として三十餘年前の修業時代の朝雲其のもので、些の虚飾もなく街糲もなき素朴簡易の一野人である、而して彼が玄關つゞきの小室に爐を焚き松風を聞きつゝ、徐ろに茶杓を把り、釜を振つて一碗の茶を喫し、陶然無我の郷に逍遙しつゝある光景は、恰も古豊米再生の俤あり、名人朝雲の彌が上にも尊き存在が偲ばれるのである。

七、名 作 概 観

『一意精進』

彼の永き藝術生活に於て、彼の神魂を刻んで送り出した大小諸作は、別項製作年表の示す

如く、随分多數に上つてゐる、蓋しそれは彼が特異の健康に恵まれてゐると、一は操行方正で、自己の藝術精進以外には何等の野心もなく、道樂もなく、一寸の光陰も金玉の如く大切に於て其業を勵んだ結果に外ならぬのである、彼れ當年七十三の高齡に上るも、其の健康状態よりせば、猶優に百歳の壽域に躋り得べく随つて猶幾多の佳作名品が留められるであらう、今左にあらゆる名作中より數點を擧げて、其の苦心の痕を檢討することゝする。

一、彫木 母子遊歩 一、銅鑄 龜山上皇御尊影

一、彫木 戲 乘 一、銅鑄 少女の圖

一、彫木 意氣吞胡羯 一、銅鑄 上代風俗香爐を捧ぐる官女

大正十一年四月、宮家、前別當平山成信指定にて

一、有栖川宮威仁親王殿下御束帶立像

一、同 妃殿下御裝束立像

右は宮邸神像として檜材にて謹作

大正十二年十二月

久邇宮殿下より攝政宮殿下御成婚式御祝として

一、白馬節會彫刻を御下命 材は富士山麓所産の桃櫻材にて謹作

大正十三年一月、男爵三井八郎衛門より

攝政宮殿下御成婚奉祝献上品

一、加茂之競馬之圖 銀鑄造にて謹作、黒塗螺銅入大高臺付

大正十五年十二月若槻首相の時

大正天皇御銀婚式奉祝、現官吏より献上品

一、振鉢三節舞 彫刻極彩色

一、彫木 竹馬遊

一、彫木 桂の影

一、彫木 大葉子

一、銅鑄 津輕藩祖爲信甲冑型、弘前公園内、身長十二尺

一、銅鑄 醫學博士、大森治豊像
福岡九州帝大内醫科部内高さ十尺

一、銅鑄 鎌倉時代波木井公座像
甲斐身延山建設、高さ六尺
〔仙崖禪師像 幻住菴安置
龍淵東瀛和尚像 聖福寺安置〕

一、彫木 十六大阿羅漢尊者
福岡市博多、聖福寺山門安置

一、彫木 大石頁雄 帝國美術院（現帝國藝術院）へ寄贈

一、彫木 阪上田村麿 京都御大典記念美術館買上

一、彫木 打毬樂 今上陛下より御大典の際皇太后陛下に贈らる

- 一、木彫 東 遊 今上陛下より高松宮殿下へ贈らる
- 一、木彫 菅 公 帝國技藝員として帝室博物館に寄贈
- 一、木彫 豊 太 閣
- 一、木彫 三 尊 佛

釋迦牟尼佛、普賢菩薩、文殊菩薩、(芝、青松寺、焼失)

『龜山上皇御尊像』 福岡市の東端(東公園)、白砂青松を縫ふて宮崎の濱に出で、敵國降伏の宸筆に輝く神門を潜りて八幡宮を拜し、踵を旋らして北望すれば、玄海の洪濤は天を摩して來り、志賀の小嶋を隔て、遙に朝鮮、辣羯を眼底に模索するを得、更に其歩を西に移せば、二大巨像を松外高く仰視される、其は一は龜山上皇、他は傑僧日蓮である、之は云ふまでもなく、元寇記念として、國民精神を作興すべく建設されたものである。

初め湯地武雄の元寇記念碑建設に因を發し、時の宮内省技師佐野昭(彫刻家)が、龜山上皇の尊像をスケ

ッチせしも、福岡出身の山崎朝雲に作らすのが至當であると云ふのに衆議一決、遂に彼れ朝雲は、此の光榮作を引受くる事になつた、而も其れは身長一丈六尺の大作で、彼の諸作中での最大のものであり、又た郷里の公園を飾り、元寇の昔、龜山上皇の宸慮に副ひ奉り、時の執權北條時宗一喝の下に、鎮西の勇將猛卒が萬死を賭して競ひ來る十萬の蒙古軍を撃滅して、爾後永く醜虜觀の痕を絶つた歴史的一大記念であるので作者として輝かしき光榮ある反面には、他に言ひ知れぬ苦心が秘められた。

『製作の苦心』 當時其の建設費の内に、宮内省より二千圓の下賜金があつたので、建設會は其れを基金として一般寄附募集に取りかゝつたが、内部に種々な故障を生じて容易に捗どらなかつた、が他方では日蓮宗關係の佐野前勳が、湯地武雄を語らひ、同公園の一部に日蓮銅像建立の許可を得、基金募集に着手したが、此方が却て速に進捗したので、佐野は更に上皇御尊像の方にも助力することとなり、漸く土臺の基礎工事を進むる事となつた。

然るに當初の設計では、日蓮像の方が、元寇記念碑よりも、土臺が高いので、總體の高さも従つて高くなる、其れでは均衡が取れないと云ふので、池を掘つて其の土にて小丘を築き、其上に尊像を建立することとなつた、而して此の小丘を圍める石は、名嶋の城趾(中納言小早川隆景居城)より運び來り、又た土臺の正面に刻まれた「敵國降伏」の文字は、醍醐天皇の御宸筆に成る、宮崎八幡宮門上の額面を轉寫したものである。

さて御尊像は、朝雲懸命の努力に依りて完成を告げたが、肝腎の土臺工事が中々豫定の如く捗どらないので、御尊像は木彫のまゝ、自邸の工房に一年近くも奉安してゐた、其間に二三の「カナリヤ」が飛び込み來り

天井を翔け廻はる程であつた、依て之を捕へて剝製としたのが、今猶彼の家に保存され、當時の奇しき因縁を物語つてゐる、又た御尊像の御冠は垂櫻とし、太刀は戦國時代を表現して之を佩かせ奉るべく、考古學者關係之助等の意見に従ひて製作したのが、後に至り太刀を佩かせず、近世の天皇の如く立櫻に改作せよと其筋から御命があつたので、彼は其命に従ひ右二點を改造したが、後に至つて識者の説に依れば、矢張り最初の垂櫻の方が正しいと云はれる、斯くて尊像は完成し、盛大なる除幕式の舉行されたのは、明治三十七年の初冬であつた、當時作者としての彼の捧讀せる祝辭を擧ぐれば、

祝 辭

今ヲ距ル六百年、元寇來襲ノ時ニ當リテ西海ノ諸侯能ク身命ヲ賭シテ皇威ヲ振輝セシ事ハ我邦開闢以來歴史上ノ一大美事トシテ傳ヘラレル伏シテ惟ルニ國家武徳ノ神靈ハ我ガ皇祖ノ御靈ニシテ世々ノ聖明之ヲ繼紹シ給フ學術工藝因テ以テ起リ農商其盛ヲ見ル由縁一ニ斯ノ武徳ノ靈ニ基カサルナシ皇國ノ命運之ヲ外ニシテ天ノ照鑑アルベカラス今又日露ノ事變ニ際シ偶々古ヲ憶フテ當年ノ事ニ説キ及ボス亦以テ我國民ノ意ヲ強フスルニ足ルモノアリ蓋シ聖軀ヲ犠牲ニシ國難ニ殉シ給フ今古皆同ジト雖モ其間自ラ紀別スベキモノアリ茲ニ元寇記念碑建設ニ當ツテ 龜山天皇ノ聖像ヲ特ニ余ニ囑シテ其原形ヲ彫造セシメラル余ノ拙技元ヨリ其ノ任

ニアラズト雖モ平生志ノ存スル所自ラ辭スベカラザルモノアリ今幸ニ其ノ成ルヲ告グ余ノ光榮何ヲ以テ之ニ加ヘン若シ夫レ 天皇ノ聖像ヲ拜シ奉リ幾何カ余平生ノ理想ヲ看得セラル、モノアラバ庶幾タハ國家武徳ノ神靈ト共ニ永ク滅ビザルモノアル事ヲ信ズ蘇瀆ヲ願ミズ謹テ祝辭ヲ呈ス

山崎朝雲誠惶頓首

明治三十七年十二月廿五日

「津輕藩祖爲信甲冑型銅像」

弘前市公園に建設され、颯爽たる威風を仰がる、此の鑄像は、身長十二尺の大作で、明治四十一年に完成された、彼の作としては 龜山上皇の御尊像に亞ぐものである、初め彼の之が製作の依頼を受くるや、参考として爲信着用の太刀、甲冑の貸與を請ふた、而も津輕家では門外不出の家寶なので、貸出して呉れなかつた、依つて彼は頻りに参考品を漁り、一日銀座の中村喜之助の美術店を訪ねて、彼か此かと見てゐる中に、反りのある太刀を發見した、之を手に取つて檢し、更に鞘に納めて元の如くに立てかけんとする刹那、如何にしけむ、刀身がズラ／＼と抜け落ちようとするので、彼は覺へず素手を以て刀身を掴んだ、之れでは何ぞ堪らむ、鮮血淋漓として忽ち指の間より迸り出で、腕と床とを唐くれなゝに染めなした、流石に剛氣な彼も驚いて手巾で傷を巻き、附近の軍醫の家に驅込んだ、が餘りに出血の多かりしため、彼はばつたり左關に卒倒した、之を見た軍醫は驚いて介抱し、辛つと正氣に返ると共に應急治療をして呉れたが、中指薬指小指の三本は、機かに繋がつてゐた、若し彼の時、少しでも力を罩めてゐたら、彼の指は水も溜らず切り落とされてゐたらうと、此の太刀は其後某華族に買取られたが、刀身を染めた彼の

指の血痕は久しく除れなかつたとの事である、而して彼の傷は筋の繋ぎ目が不完全であつた、め久しく不自由を感ぜさせられた、一方此の出来事が津輕家に聞へたので、同家では彼の製作真心の眞剣なのに感激し、津輕から太刀と甲冑とを力士に持たせて彼の家に届けて来た、で彼は太く其の厚意に恐縮し、萬一の震火を慮り、之を枕頭において保管した、此の如き挿話を留めた程、彼は滿腔の熱誠を罩めて仕上げたので、其像は雄偉森嚴、凜乎とし英雄爲信を再生せしめ、永く北門の鎮として津輕人士を仰視せしめてゐる。

『木 彫意氣香胡羯』

之は上古朝鮮征討の際、敵軍の捕虜となつた我が勇士伊企儼が、敵に屈せずして、朝鮮王、腎を食へと云ひつゝ斬首された史實に依りて作られたもので、日本美術協會展覽會に出品、

第一席金賞牌を受領し、宮内省御買上となつた當年評判の傑作である、時は恰も明治三十七年、日露戦役に際し、國を舉げて人心緊張してゐた。

明治天皇は親しく之を憐はして「我が彫刻師に此の如き意氣の熱烈なものがあるか」と、太く御喜びになつたと云ふ事を洩れ承り、彼は手を額にして感涙に咽んだと云ふ事程左様に快心の作であつた。

『木 彫阪上田村磨』

は皇太子殿下初度の御節句を奉祝のため製作、昭和九年五月貴族院より献上したもので、宮内省を通じて製作の御下命を拜した、之は最初作品の指定はなかつたので、彼は考慮の上「鍾馗」を作ることゝし其の準備にかゝりしに、廣幡皇后宮太夫より此由を 今上陛下に申上げると、陛下は阪上田村磨にせよとの教旨を賜はれるよしを洩れ承はり、俄に變更する事となつた、恰も好し、大正天皇御即位の節に御塔乗遊ばされし汽車の木材が手に入つたので、之を用ひて作り上げ、

天覽に入れると、陛下には殊の外御喜び遊ばされ、特に 皇后陛下には、稀に見る佳作であると御嘉賞

遊ばれしことを洩れ承はり、彼は一入の面目を施した。

『木 彫打毬樂』

は 今上陛下御大典記念のため、宮内省より御下命の作にて、其れは 皇太后陛下が御所藏遊ばされてゐると承はる。

『木 彫東遊』

宮内省よりの御下命作で、之は高松宮殿下へ献上さる。

『木 彫大石良雄』

昭和八年の作で、第十四回開催の帝展出品後、帝國美術院へ寄附。

『木 彫三尊佛』

即ち「釋迦牟尼佛」「普賢菩薩」「文殊菩薩」東京市芝區愛宕下、曹洞宗關東本山、青松寺安置、之は彼が清淨無垢の道心を罩め學生の精根を盡くし、連續四ヶ年を費して完成せしめた傑作で、正に國寶級に屬するものであつた（巻頭照影参考）、其の完成は昭和九年八月九日で、開眼供養は同年九月に舉行され、當日は長くも閑院宮殿下より代參者特派され一層の光彩を添へた、然るに惜しい哉、越えて同十一年二月の節分に、些少の不注意に依りて火を失し忽ち烏有に歸して了つた、其の時、作者たる彼の失望落膽の大なりしことは非常なものであつた、當時病臥せる金子伯も之を聞きて同情に堪へず、熱誠罩めし長文の親書を寄せて、閻々の淵に沈める彼を慰撫且つ激勵された、彼れ即ち飄然として再造の勇氣を振起し、同年七月二十二日榎の名木を茨城縣下より切り出して、更に三尊の彫刻に取りかゝり日夜屹々として其の完成に精進しつゝある、此の本尊の全長八尺にして脇立の兩像も亦た之に準ずるの大作を、七十三の老齡を以て再び仕上げんとするのであるから容易の業ではない、彼の身にも魂にも三尊の現化するにあらざる限り、到底常人に成し得ない眞に尊とま捨身の勤行である、而も彼の巖をも透す一念は必ず近き將來に酬ひられて、前

作にも勝る秀越なるものが再び完成され、昭和彫刻を代表して永く千歳に輝くであらう。

八、彫刻に於ける其の主張

『其人と其作』 其作品に對すれば其人が理解されねばならぬ、即ち人と作品とは必ず一致して行くのが本筋である、試に古來より喧傳さるゝ名品佳作を遣せる人々と其作品とを對照せば、此言の藝術上の鐵則である事が首肯さるゝであらう、現に朝雲其人の如きは、正に此の鐵則に當て嵌められた作家である、而して彼は徹頭徹尾獨立獨歩の態勢を堅持する人である、故に其の生活上にも他人の世話にならぬ事をモットーとして生涯を一貫して來た、従つて此の意氣は常に其の製作の上にも盛られて、他に倣して節を屈せず、自づから信する所に直往邁進して來た、この結果として其の製作にも他から種々な條件を付けて依囑さるゝ事を喜ばない、其れは則ち自己の藝術心と、創造及技能を或一定の範圍内に制限されて了ふからである、故に彼は云ふ、「凡て他から注文されるものには、快心の作は出來難い」と、之は慥かに動かしがたき藝術心理の喝破されたものである。

『快心作』 されば彼の諸作に就いて之を視るも、彼の何者にも捉はれず、何事にも妨げられず、生活不如意の中において、唯だ一意その製作にのみ没頭して其心魂を打ち込める時のものに、快心作が多かつた、斯んな實境にあつた時の作には、或は不羈奔放なものあり、粗笨荒唐のものもあるか、亦た意外な傑作もある、凡べて生々しき鑿の痕を留め、潑瀾たる意氣の罩められた作は、作者が何物にも捉はれず、何の掣肘も

なく、其の意圖と氣魄とが合致して遺憾なく發揮された時のものに限られてゐる、即ち無念無想の郷に入り其處に初めて真如の月が作品の上に現出さるゝのである。

彼の如き老來其の名聲の籍甚すると共に、諸方より種々な依頼が簇出して來る、而も清澄水の如き藝術良心の豊かなる彼は斯乎之を斥けつゝあるも、猶明月の片雲を拂ひがたき惱みありと、竊かに塵世の儘ならぬことを聊つ一人となつてゐる様だが、蓋し、之は那の大家にも免れがたき煩累であらう。

此の故に、作者自己が、最も自己に適切で、又た作つて見たいと思へるものを他より依頼された時程愉快なものはない、而して斯んな時にこそ名品佳作が仕上げられるのであつて、少しでも條件を付けられたものには、眞に自己を満足さすものは容易に出來ないものである。

唯だ彼の如きは、富を求めず貴を望まず、快心の作を留めて永く天地の間に自己其のものを生かさんとするの外に何物もない、而して彼と併せて其の作品の貴き所以も亦た此にあるのである。

九、閱 歴

慶 應 三 年 二月十七日福岡市博多櫛田前町ニ生ル

明 治 十 七 年 福岡市ノ佛師高田又四郎ニ師事シテ三ヶ年間修業ノ後獨立シテ佛像及獨創ノ彫刻ニ從事

×

明 治 廿 六 年 立志、京都ニ出ヅ

同 廿八年 三月、京都ノ第四回内國博覽會ニ木彫「養老孝子」ヲ出品シテ妙技銅賞牌ヲ受領ス

同 廿九年 一月、東京市ニ出ヅ高村光雲ニ就キ爾後約二ヶ年師事ス

同 卅一年 東京彫工會及日本美術協會審査員トナリ爾後毎會從事ス

同 卅三年 日本美術協會役員ヲ囑託セラレ爾後展覽會審査員ノ外協議員幹事等ニ囑託セララル

同 三十九年 第十五回彫刻競技會へ 皇后陛下御行啓ノ際御前彫刻ヲ命ゼラル

同 四十年 第廿一回彫刻競技會へ 皇后陛下御行啓ノ際御前彫刻ヲ命ゼラル

同 四十年 東京勸業博覽會美術部審査員ニ任命セララル

同 四十一年 日本彫刻會ヲ起ス

同 四十二年 東京府美術及工藝展覽會審査員ニ任命セララル

同 四十三年 文部省公設美術展覽會審査員ヲ仰付ラレ爾後大正七年迄毎會審査ニ從事ス

大正 二年 十一月八日、日本美術協會第五十一回展覽會へ 天皇陛下御行幸ノ際御前彫刻ヲ命ゼラ
レ免ノ木彫ヲナス

大正 三年 三月、大正博覽會美術部審査員ニ任命セララル

同 八年 七月、農商務省美術工藝審査員ヲ仰付ラレ爾後大正十一年迄從事ス

同 八年 十月、帝國美術院展覽會審査員ヲ仰付ラレ爾後引續キ從事ス

同 十三年 三月、東京府立商工獎勵工藝品展覽會審査員ヲ囑託セララル

同 十三年 五月、帝國美術院展覽會委員ヲ仰付ラレ爾後審査ニ從事ス

昭和 二年 六月廿九日、帝國美術院會員被仰付ラル

同 九年 十二月三日、帝室技藝員ヲ命ゼラル

同 十二年 六月、帝國美術院會員ヲ被仰付ラル

同 十四年 三月、大阪市松坂屋主催個展開催

一〇、製作年表

木彫 「養老孝子」 明治二十八年三月 京都第四回内國勸業博覽會出品、妙技三等賞、宮内省御用品

同 「文珠菩薩」ノ大額面 同 三十年四月 日本美術協會展出品、前者ハ銅賞後者ハ銀賞

同 「鐵拐仙人」置物 同 三十年九月 彫工競技會出品、銅賞

同 「元祿風俗遊花之圖」 同 三十年九月 彫工競技會出品、銅賞

同 「母子」 同 三十一年十二月彫工競技會出品、後巴里博覽會出品
前者ハ金賞、後者ハ銀賞、皇宮職御買上

同 「掃除」 同 三十二年八月 佛國巴里博覽會出品

同 「氣比齊晴」 同 三十二年八月 佛國巴里博覽會出品

同 黃楊木「少女猫ヲ抱ク圖」 同 三十二年八月 佛國巴里博覽會出品、銀賞、同博にて賣約

鑄銅 「少女之圖」 同 三十三年三月 日本美術協會出品銀賞

鑄造 「野球技之圖」一對 同 三十三年 第十五回彫刻競技會出品銀賞

楓材木彫 「女 學 生」 明治三十四年五月 日本美術協會出品銀賞
 銅像「龜山上皇御尊影」身長拾六尺 同 三十四年 福岡市東公園ニ建設
 楓材木彫「小兒椅子ニ戯圖」 同 三十五年五月 日本美術協會出品宮内省御買上
 鑄造 「乳 搾」 同 三十六年四月 日本美術協會出品銀賞及金賞、後米國聖路易萬博出品
 木彫 「海岸の子供」 同 三十六年 大阪ニテ日本勸業博出品銀二等賞宮内省御買上
 同 「戲 乘」 同 三十七年四月 第三十五回美術協會出品、後白耳義及日英萬博出品銀賞及金賞
 同 「意氣吞胡羯」伊金儼 同 三十八年四月 第三十六回美術協會出品金賞宮内省御買上
 鑄銅 「上代風俗柄香爐ヲ捧
 ズ官女」 同 三十八年八月 第二十回彫刻競技會出品金賞宮内省御買上
 木彫 「葛城山の狩」雄略帝 同 三十九年四月 日本美術協會出品銀賞
 鑄造 「新 裝」 同 三十八年四月 白耳義利榮壽博名譽賞
 木彫 「竹 馬 遊」 同 三十九年三月 第三十九回美術協會出品、金賞宮内省御買上
 鑄造 「彫塑家とモデル」 同 三十九年八月 第二十一回彫刻競技會出品、金賞宮内省御買上
 木彫 「桂 の 影」 同 四十年四月 東京勸業博出品一等賞宮内省御買上
 鑄銅 「夫のかたみ」 同 四十年四月 東京勸業博出品銀賞
 銅像 「津輕藩祖爲信公甲冑
 型」身長拾貳尺 同 四十一年 弘前市公園建設
 木彫 「種 痘」 同 四十一年四月 日本美術協會出品銀賞

木彫 「稚 兒 文 珠」 明治四十一年五月 日本美術協會出品
 鑄銅 「砂 文 字」 同 四十一年八月 第二十三回彫刻競技會宮内省御買上
 木彫 「大 葉 子」 同 四十一年十月 文展出品三等賞政府買上
 木彫 「明 の 封 冊」 同 四十一年十月 國畫玉成會出品
 銅像 「醫學博士大森治豊」
 身長十尺 同 四十二年四月 福岡市帝國大學内ニ建設
 木彫 「拾 得 子」 同 四十二年四月 東京美術工藝展出品東京職御買上
 同 「夏 の 夕」 同 四十三年 日英博覽會出品銀賞及金賞
 同 「寒夜之衛士」 同 四十三年 同上 銀賞及金賞
 同 「漁 樵 問 答」 同 四十三年三月 東京美術及工藝展出品銅賞
 同 「狗 兒」 同 四十三年八月 第二十五回彫刻競技會出品宮内省御買上
 同 「擲禪杖」道元禪師
 之傳説 同 四十三年九月 第二回日本彫刻會出品
 同 「張 果」 同 四十三年九月 第二回日本彫刻會出品
 同 「達 磨」 同 四十三年十月 第四回文部省展出品（以後審査員トナリ授賞ナシ）
 同 「東奥の乙女」 同 四十三年十月 第四回文部省展出品（以後審査員トナリ授賞ナシ）
 鑄造 「達 磨」 同 四十三年十月 第四回文部省展出品（以後審査員トナリ授賞ナシ）
 木彫 「小 兒 と 犬」 同 四十四年三月 日本美術協會
 同 「布 袋」 同 同 東京勸業展覽會出品

木彫	「慈童」	同	四十四年九月	日本彫刻會出品
同	「龍」	同	四十四年十月	文展第五回出品
同	「滄溟」	同	大正元年十月	第六回文展出品
同	「林和靖」	同	同	第六回文展京都出品
同	「供養の乳島」	同	同	第五回日本彫刻會出品
同	「竹生島」	同	同	第七回文展出品
同	「山そだち」	同	同	同
同	「竹林の山濤」	同	同	同
同	「土部」	同	同	同
同	「産屋」	同	同	同
同	「兩悠々」	同	同	同
唐白檀木彫	「觀音」	同	同	同
同	「積る雪」	同	同	同
同	「同級生の弔辭」	同	同	同
同	「拾得養虎」	同	同	同
同	「赤壁ノ蘇東坡」	同	同	同
同	「嬖歌」	同	同	同

木彫	「見參」	同	大正五年十月	第五十二回美術協會展出品
同	「枝をり」	同	同	同
同	「兎航」	同	同	同
同	「みなかみ」	同	同	同
同	「藥研」	同	同	同
同	「獲物」	同	同	同
同	「雙狗」	同	同	同
同	「響泉」	同	同	同
同	「釋尊」	同	同	同
鑄銅	「弗多羅」	同	同	同
木彫	「狹丹類相乙女」	同	同	同
同	「慧星」	同	同	同
同	「上矢の鏑」	同	同	同
同	「寶珠」	同	同	同
同	「某禪僧」	同	同	同
同	「鷺」	同	同	同
銅像	「鎌倉時代波木井公」	同	同	同
	身長六尺坐像	同	同	同

木影	「行	者	大正十年 十月	第三回帝展出品
同	「繩床の仙厓	」	同 十一年 十月	第四回帝展出品
同	「妙	韻	同 十三年 四月	第六十五回美術協會展出品
同坐像	「十方大阿羅漢尊者	」	同 五年	年起工、同十三年十月完成、福岡市博多聖福寺山門安置
同	「頭	山翁	同 十三年 十月	第五回帝展出品
同	「靈	照女	同 十四年 四月	第六十七回美術協會展出品
同	「雪	舟像	同 十四年 十月	第六回帝展出品
同	「扶	翼臣	同 十五年 四月	太子奉養會展出品
同	「力	角	同 十五年 十月	第七回帝展出品
同	「岩佐又兵衛勝以	」	昭和二年 十月	第八回帝展出品
同	「樂	人	同 三年 九月	大禮記念京都大博出品
同	「前	鬼後鬼	同 三年 十月	第九回帝展出品
同	「維	摩	同 四年 十月	第十回帝展出品
同	「巢林子近松翁	」	同 五年 三月	聖德太子奉養會展出品
同	「觀	音	同 五年 十月	第十一回帝展出品
同	「紗	羅佐繪	同 六年 十月	第十二回帝展出品
同	「鳩	杖	同 七年 十月	第十三回帝展出品

木影	「大石	貞雄	昭和八年 十月	第十四回帝展出品
同	「御本	立鶴	同 九年 四月	第九十四回美術協會展出品
同	「釋迦牟尼佛	」	同 九年 八月九日	完成 同十一年二月四日節分、芝青松寺内デ焼失
同	「善薩	」	同 九年 十月	第十五回帝展出品
同	「坂上田村麿	」	同 十年 四月	第九十七回美術協會展出品
同	「賣	茶翁	同 十	年 全官吏献上品
木影彩色	「振	鉢舞	同 三	年 宮内省御下命
同	「打	毬樂	同 三	年 學習院ヨリ宮内省献上
同	「萬	歳樂	同 三	年 日本美術協會寄附
木地木影	「萬	歳樂	同 三	年 宮内省ヨリ高松宮へ
木影彩色	「東	遊	同 九年 五月五日	貴族員ヨリ宮内省へ
木影(補)	「坂上田村麿	」	同 九年 十月十二日	帝展出品、京都美術館買上
同(框材)	同	」	同 十一年 四月二十四日	美術協會展出品(第百回記念展)
同極彩色	「内	裏雛	同 十一年 十一月四日	文部省美術展出品(帝室博物館へ寄贈)
同(框材)	「菅公	」	同 十二年 四月十二日	日本美術協會第百一回展出品
同	「良	寛禪師	同 十二年 十月十一日	文部省美術展出品大阪ニ留ム
同	「豐	太閤	同 十三年 十一月十日	文部省美術展出品
同	「鷹ヶ峰の秋	」	同 十三年 十一月十日	文部省美術展出品

一一、其の門生

「門規」 彼は門生としては一時に一人以上を家庭に置かないことにしてゐる。而も何時の間にか數十名の門生を數ふる様になつた。最初の門生に同郷のものがゐた。彼は此男に將來の希望を抱いて教導したが一朝その親が死亡したので郷里に歸り約十年を経過した。而して再び東上して來た時には、彫刻家としての彼の將來性は既に失つてゐた、藝術上には一寸の怠慢を許さぬものである。

其れから門生の中で最も傑出せるは佐藤朝山である。彼は現に帝國藝術院會員、日本美術院同人である。彼に亞いで故松尾朝春以下、左の順序に於て精進を續けてゐる。(但、入門順に見る)

大山朝眞	早川朝洋	佐藤朝山	故松尾朝春
森山朝光	富永朝堂	故福山新太郎	橋本朝秀
佐藤光重	翁朝盛	宮本朝濤	山崎秀夫
三木貞夫	(以下現入門生)	大村清隆	綿引弘
末廣正道	押田政夫		

彼は嘗て門生に對して自個雅號の一字を頼ち與へたが、今では其の本名そのまゝで行くことを主張してゐる。現に最近の門生等は之を現實に行つてゐる。序に彼れ自個の名稱朝雲の由つて來れる所を叙してその風懷を偲ぶこととする。

「朝雲」 彼の本名は春吉であつて、朝雲は其の雅號として用ゐてゐた。然るに大正二年三月一日附を以

て福岡市長より改名を許可され、其れ以來雅號が本名となつて了つた。其際の許可證には左の如く記されてゐる。

福岡市楠田前町三十六番地

源吉弟 戸主 平民

山崎春吉

業務支障上ニ關シ、大正二年二月二十八日附出願、朝雲ト改名ノ件許可ス

大正二年三月一日

福岡市長

佐藤平太郎

抑々朝雲の號は、彼の「文殊と獅子の板彫」を完成せる時、其師より何とか號をつけ様との事に、彼は光雲の雲を取りて雲山とせば如何と申出でしに、師は、「其れはおかしい、單に雲山だけなれば宜い、が其上に苗字を加へて山崎雲山となると、山が三つも重なる、故に朝雲が宜からう」との事で、爾來之を以てその雅號として、當時の板彫に初めて之を刻したのである、後に至りて藤原定家の歌に

「春の夜の夢の浮橋とたえして峰にわかる、横雲のそら」とあるのを發見して其號の此の歌意に符合せるは偶然とはいへ、淺からぬ因縁がある様にもおもはれて微笑みの種としてゐると、又た別に「羯摩」の雅號を有してゐるが、之は滅多に用ゐない様である。時として其の餘技としての歎賦に用ゆる。

「餘技」

彼の書を見たものは滅多にあるまいが、興來れば則ち筆を把つて胸中の風懷を寫す、而も巧を

求めず妙を欲せず、其心の往くがまゝに筆之に随ふもので、如何にも瀟洒閑逸、恰も彼の茶に於けるが如き情趣がある。

今春、大阪松坂屋に於ける彼の木彫展に一幅を掲げられてゐた、彫刻は彼れ本筋の至要だけに鑑る方で随分肩が凝つたが、此方は七珍八菜の盛饗の後に番茶一服といふ心地せられて誠に佳い気分を興へられた、蓋し、彼れは仙崖の遺韻饒けき博多出生の代表的藝術家として、其の之れあるは當然すぎる程に當然の結晶であらう。

二二、其の家庭

「邸宅」 彼は東上以來、四十年に亘り本郷駒込臺に棲んでゐる、(本郷區駒込林町一四二)、今の邸宅は自己好みの設計に成るものだが、其の簡素な中にも雅趣ありて實生活に適したものである。

「家族」 主人公の彼れ、當年七十三、夫人エイ子七十、共に頑健で、去る昭和十二年十一月十四日、目出度く金婚式を挙げた。

長男坤象 三十三、洋書家として一家を成す。

略歴 岡田三郎助に師事、東美卒業、帝展、文展、出品、光風會々員、春台美術委員、農に従軍して

長女鶴子 實業家澁澤倉庫の幹部、笠原厚吉に嫁す。

漢口徳安に至り第一線に立つて書筆を揮つた

二女博子 辯護士水野周治郎に嫁す。

三女隆子 會計士實業家、渡邊義雄に嫁す。

四女美佐子、陶工石村定治郎に嫁す



(日當式婚金) 人夫の共と雲朝崎山

子女は何れも父母に似て健康に恵まれ、且つ圓滿なる家庭の主婦たり既に多数の孫あり其中の二名は、現在兵役に服し御國に御奉公中。

彼の家庭は彼の人格が反映して和氣瀟々、常に春光の満つるを見る、蓋し、普通の習俗として彼れ程の地位

に上れば其の意満ち氣の傲るものなるが、彼には此の尊大が微塵もない、三十年、四十年前の彼れ其のまゝである、先づ其の邸宅に何等の飾りなく簡素そのものであるが如く、其人また簡易卒直、宛然山寺の一寒僧

を見る様である、而して其の語る所を聞き、又た其の作る所のものを視れば益々其人の真相が他の神魂に映寫されて来る、其の家庭の常に清福に満たさるゝことは想像に餘りあるであらう。

一三、其の趣味

『茶道』 彼は茶を好む、而も彼の茶は世俗の誇る道具自慢でもなく、又た富豪權貴に接觸を求めが爲めでもない、眞に茶によりて自づから慰め自づから樂しむと云ふのにある、請ふ試みに東都にある彼の邸を敲け、其邸は駒込臺の高地にあるが、今や其の周圍は家屋櫛比して些の餘地もない、僅に數室を有する陋屋で、數弓の小庭を存してゐる、故に別に茶室もない、玄關つゞきの所に爐を設け、古びた自在鉤に釜を吊してゐる、彼は多くは工房にありて製作に没頭する、而して神魂共に疲るれば即ち此に來りて徐ろに茶を點じて無我の境に入る、而して作品の仕上れる時に此に持ち來り、茶を喫しつゝ之に對すれば、其作の長短得失が、自然に見直されて来る、而して之を繰り返す中に初めて完璧の域に入るのであると。

彼の曾て京洛生活の時代に、京都美術學校長として今は故人の今泉雄作がゐた、彼は有名な美術通にして茶にも精しかつた、而して京洛は茶道本家の存する所で、京人は通じて茶を嗜しむ、彼れ即ち今泉に接し京人に親しめる間に茶趣味を醗酵されて其れが老後の不斷の清涼劑となりて彼の心懷を慰藉する様になつたものと想はれる。

彼の玄關つゞきの茶室には、何處かで掘出した天平時代の木彫面が掲げられてゐる、古色溢るゝ雄偉な作

だが缺所がある、其の茶道具といふのも皆な彼の翫賞に適ふ趣味本位なものだ、而して茶杓の如きはお手製である、想ふに利休居士の眞意は斯ういふ境地にあつたらう、茶は其の心に會して無形の閑境を樂しむべきもので、其席に用ゆるの器玩に豪華を争ふは、市井群俗の徒に委すべきで、眞人の茶趣味は彼の如くに實際生活に即して其の塵慮を洗ひ、清新の氣を養ふためにすべきであらう。

『翫古』 茶に骨董は附きものである、所謂茶人の多くは皆な大金を擲つて名器珍品を争ひ求めて之を茶席に飾り、其の所藏慾を誇るのが常となつてゐる、然るに彼の如きは借金こそなければ本來無一物の無慾漢である、敢て左様な名寶を私藏しようといふ如き俗念はない、財布に餘剩のある時、たま／＼其の美術眼に適ふ趣味の作に遭へば則ち之を求めると云ふ程度である、但し藝術家としての彼れだ、佳作傑作ある所には毎時でも老骨を提げて見學に出かける、一は藝術心境を養ひ、他は其の趣味を滿悦せしめる爲めである。

彼は語る「我等の京洛時代には五拾圓も投すれば立派な乾漆佛だの古陶器などがあつた、今では其等の中から往々國寶指定のものなどが出てゐる、我等の如きは其んなものゝ持ち合せがないから、火事や泥棒の憂もなければ、死後に未練を留むる必要もなく、唯だ我が神魂を我が作品に留めて天下の名境に永く生きて行きたいと思ふのみである。」と云ふものゝ、彼の目に留つた逸品の幾種かは秘藏されて時々其の茶席に伴はれ彼の心を慰めつゝあるものとも想はれるのである。

一四、逸談 一 束

彼は洒落な中に謹直味の多いので逸談は少ない様である、其れでも他から見て現代離れのした二三の話題を拾つて見る。

『十六阿羅漢其他』

之は彼の郷里、博多聖福寺山門内に輝く彼の力作である、今之が製作の動機を聞けば、其處に一種微妙な話がある、彼は大正五年三月肺炎に犯され、癒るには癒つたが、どうも病後の経過面白からず、同年五月再び病褥に就いた、而して醫師はチブス、又た肺炎の疑ありと云ふので、更に帝大醫科病院に入り、係醫馬場辰二の熱心なる加療の下に呻吟した、當時發熱四十度二分の六に上り殆んど危篤の淵に臨んだ、而して夢幻恍惚の中に不思議な暗示を得、其れから薄紙を剝ぐ様に次第に快くなつて來たが何分衰弱が甚だしいので、伊豆の伊東温泉に二ヶ月計り滞在、小兒の氣分に立ち返りて加療、更に郷里博多に轉地し、豫て教化に浴しつゝある東瀛和尚の許に寄寓し、其の精神的鉗槌を受くると共に、曾て住み馴れし郷土の風氣に五臟の餘炎を洗つた、其頃參禪の居士、平岡良助、青柳某、梅崎榮次郎、太田某等の面々に對して、和尚の言ふには、「先代愚溪和尚の時代に、山門が焼けた、當時私は小僧ではあつたが、此の山門だけは自分で再建したいと願した、幸ひ大工の棟領で岩崎庄三郎といふものあり、一時金を立て替へ、大勢を役役して見事山門を再興して呉れたので、私は其後この費用は拂つたが、この棟梁の苦心に酬ゆるに十六羅漢を作り、其中の一羅漢に此の棟梁を刻みたいから、君どうか之が製作を引受けて呉れまいか」とあつた、彼は和尚の言に反對し、其れは前例のないことであるから、大工の像は別に之を作つたが宜しい、といつた、而して和尚等懇請の結果、彼は遂に之が製作を引受けた、その時和尚曰く、「君の大病は大作をやるための暗示を受けたのである」と、彼れ即ち龕の病中呻吟の中の暗示の符合に深く感發する所あり、益々この

大業完成に熱中し、其れに加へて東瀛和尚の像をも作るべく申し出ると、謙遜の和尚は堅く之を辭したが、居士連が之に反對し聽かれぬ様なれば寺の世話は出來ないと言ひ出したので、和尚も到頭首を堅に振つて承諾した、其處で彼は和尚がこの寺に在動五十年を祝すといふ意味で作り上げ、それを聖福寺に安置した、又た和尚は大工の棟梁の彫刻料は自分で拂ひたいと云つて、永年に亘り善男善女の捧げて呉れた布施の金を蓄へてあつたのを、彼に與へて其勞を慰めて呉れた、其金は和尚が永い間の貰ひ貯めであつたので、之を使つて行くのに勿體ない氣がした。

其れから十六羅漢は、一年に一二鉢づゝ(材木はタモ)作り上げ、八年かゝつたが、其れが未だ完成を見ずして和尚は遷化した、これより先き、十六羅漢の前に仙崖和尚を頼まれたので、之を作り、次に大工棟梁の像、それから十六羅漢と云ふ順序で作り上げた、而して仙厓和尚を仕上げて之を携行し、聖福寺の書院で自作の展覽會を開いた。因にいふ羅漢安置所山門の繪天井は同郷の名匠、故富田溪仙の筆に成つたものである。又東瀛和尚の彫刻材料での挿話がある、其れは上野東叡山の奥院に千有余年前の昔からあつた樟の大木を或る木挽が大正七年に拂下げ調材しつゝありとの話があつたので彼は、今猶有りや否やを疑ひつゝ滿一ヶ年以上を経たる翌年に其の現場に至れば、不思議にも直徑五尺二寸長さ一間の巨木の残つてゐるので彼は、是非願けて貰ひたいと言ふと、木挽は神木を伐採せる事として總てに大層注意され、各方面より種々な口實にて求めに來る者有るも、容易に頷たずに居る、併し貴下は何に使用する心算かとの質問に問へて「左れば其れは僧侶の像を彫刻するのである」との話聞き、木挽は膝をたゞいて、それよく、其れが本當なら話すが「實は昨夜坊さんが親指と人差指の間に玉を挟み合掌して一心に念じて居る夢を見た」が、それこそこの

木を譲るべき暗示ではあるまいかと思ふとて願ける事を快諾してくれたが、今度は價格が當時としては莫大
なので支拂に困却した、然るに同郷出身の三井の圓琢磨は和尙有縁の人なので、夫妻の寄附で之を支拂ひ、
首尾能く完成せしめた。又た之を納める厨子が必要となつたが、當時其地の信徒荒津長七の寄進あり、檜材
にて作り上げ此の中に其を安置し寺寶として永く當年の名匠朝雲の心魂を留むることゝなつた。

昭和美術百家選、第二十三編「山崎朝雲」畢

昭和十四年八月十日印刷
昭和十四年八月十五日發行

(非賣品)

昭和美術百家選、第二十三編(山崎朝雲)奥付

著者兼發行人
兼印刷人

大阪市北區見野町二十八番地

藤井石童

不許複製

印刷所

大阪市北區見野町二十八番地

美術日報社印刷部

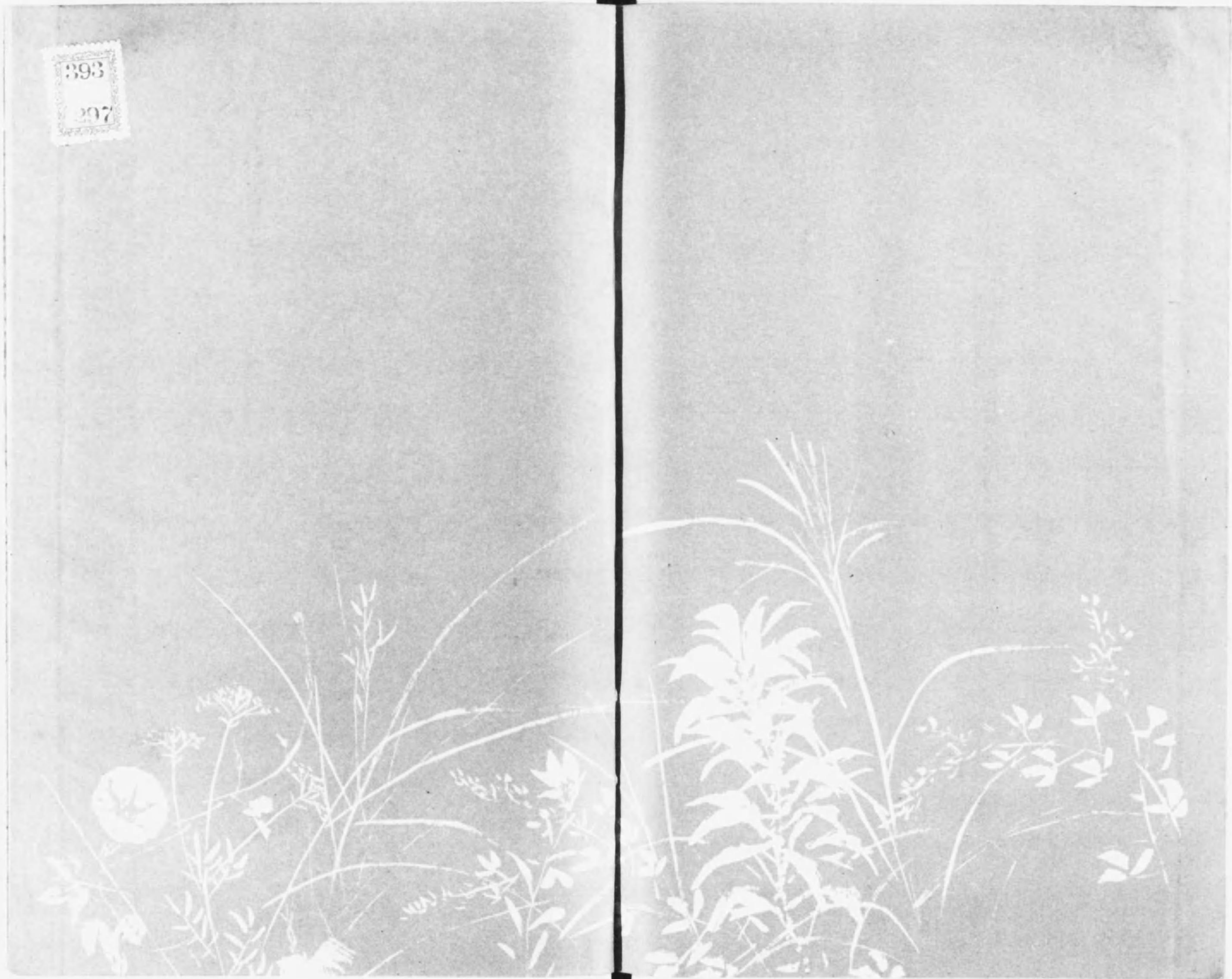
發行所

大阪市北區見野町二十八番地

美術日報社

電話北六一五七番
編替口座大阪六九二〇七番

393
297



終